指揮者が違うと何が違うの？・ヴァントの場合

今回はギュンター・ヴァントの演奏を聴いてみよう。

初回のチェリビダッケ、前回のザンデルリンクと同様、1912年生まれ。2002年02月14日スイスで亡くなった。出身地は、ドイツ中西部ヴッパータル。N響の名誉指揮者ホルスト・シュタインの生まれた町でもあり、昨年ノヴァホールで快演を聴かせてくれた上岡敏之が音楽監督を務める町でもある。

1946年から28年間、ケルン市の音楽監督、1980年代は北ドイツ放送響の音楽監督を務め、最晩年は、主に北ドイツ放送響、ベルリン・フィル、ベルリン・ドイツ響、ミュンヘン・フィルに客演していた。ブルックナー・ファンにとっては、ケルン放送響と交響曲全集を吹き込んだ指揮者として有名である…

実は、巷では評判の高いブルックナー全集なのだが、個人的には余り好きでは無い。目立った傷も無いし、何が悪いかと言われれば「いや、特に」と返さざるを得ないのだが、余りにも真面目過ぎて、隙がなく、何かつまらない。

そういうつまらない指揮者だとずっと思い込んで敬遠していたのだが、1996年チェリビダッケが亡くなった後、知人達と、生きている指揮者で、これから誰を聴けば良いのかと話していて、話題に上ったのがヴァントだった。　知人達は、皆「真面目過ぎてつまらない」という感想に同意してくれた上で、「でも、最近のヴァントは違うんです」と言う。

騙されたつもりで聴きに行ったミュンヘン・フィル定期演奏会のブラームスが面白かった。翌年のベルリン・フィル定期演奏会のブルックナーが更に良かった。

思えば、若き日のヴァントは、余りにも慎み深かったのだろう。年老いて、遠慮無く自分の出したい音を率直に楽団に要求する様になって、俄然、面白くなった。とにかく音厚と厳しさには何時も圧倒された。

その一方で、ポストホルンを振っているときの、モーツァルトを振ることが出来て、嬉しくて嬉しくてたまらないと言いたげな、無邪気な後ろ姿も、未だに覚えている。

プログラム

ブルックナー：交響曲第7番ホ長調　第1楽章から
　ギュンター・ヴァント指揮北ドイツ放送交響楽団（1999.08.27リューベックLive）

シューベルト：交響曲第5番変ロ長調 第1楽章
　ギュンター・ヴァント指揮北ドイツ放送交響楽団（2001.10.28～30）
　セルジュ・チエリビダッケ指揮シュトゥットガルト放送交響楽団（1973.11.09Live）

＊＊＊ 休 憩 ＊＊＊

ブラームス：交響曲第4番ホ短調op.98　第4楽章
　ギュンター・ヴァント指揮北ドイツ放送交響楽団（1997.12.07～09）

モーツァルト：セレナード第９番ニ長調 K.320「ポストホルン」から抜粋
　ギュンター・ヴァント指揮北ドイツ放送交響楽団（2001.04.08～10）

（2008.02.16

【米倉ライブラリーから】
サン=サーンス：交響曲第3番ハ短調op.78 から抜粋
　小澤征爾指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
　（2002.11.3　ウィーン・ムジークフェラインザール生中継 Live）